

なかったとも考えられます。全ての手続き記憶検査に共通する問題ですが、第1試行目から成績が良好な場合、技能はどう判断するべきでしょうか。先生方のご意見をお聞かせいただければ幸いです。

敬具

## 文 献

- 1) Appollonio I, Grafman J, Clark K et al: Implicit and explicit memory in patients with Parkinson's disease with and without demintia. Arch Neurol 51; 359-367, 1994
- 2) Appollonio I, Grafman J, Schwartz V et al: Memory in patients with cerebellar degeneration. Neurology 43; 1536-1544, 1993
- 3) 川合寛子, 河村満, 福井俊哉ら: AD患者とPSP患者の手続き記憶の検討—獲得と保持の二重乖離—. 神経心理 14; 275, 1998
- 4) 三村将, 加藤元一郎, 師岡えりのら: 痴呆における手続記憶と運動性記憶. 老年精神医学雑誌 8; 138-143, 1997
- 5) 月浦崇, 鈴木匡子, 藤井俊勝ら: 健忘症患者における手続き記憶—運動技能と知覚・認知技能との解離—. 神経心理 14; 216-224, 1998

## 月浦 崇氏からの返書

### 前略

先日神経心理学 14 巻 4 号に掲載されました小生の論文「健忘症患者における手続き記憶—運動技能と知覚・認知技能との解離—」に対しまして、御意見をいただきありがとうございます。早速、興味深く拝読させていただきました。御指摘を受けた点について、筆者の視点から意見を述べさせていただきます。

### 1. 知覚技能について

川合氏は我々が観察した症例において、線画完成課題 (Snodgrass & Vanderwart, 1987) から観察された知覚技能学習の障害については健常者との比較が重要であることを指摘されております。その御指摘についてはまさにその通りで、健常者との比較を行うことが本症例の知覚技能の障害を裏付けるにはベストな方法論であることに異論はありません。しかし、線画完成課題を知覚技能学習の評価方法として用いる場合に、川合氏が指摘されるように健常者との比較が絶対十分な検討方法と考える必要はないと思います。川合氏は Appollonio ら (1993, 1994) の報告から線画完成課題では健常者の学習効果が認められず、また健常者と健忘症患者とで学習効果に差がなかったことを氏の意見の根拠のひとつとされています。しかし、この課題のオリジナルとも言える Gollin 不完全図形課題を用いて健忘症患者と健常者の知覚技能学習の効

果を検討している Warrington & Weiskrantz (1968) の報告では、①健忘症患者・健常者ともに時系列に従って学習効果が認められること、②その学習の効率は健常者と比較して健忘症患者が悪いことが報告されています。また Milner ら (1968) も同様の報告しています。これらのことから考えれば線画完成課題は知覚技能学習の評価方法としては妥当なもののひとつであり、それがたとえ個人レベルであっても学習効果が認められないことを論ずるには問題がないと考えます。もちろん我々の症例が示した知覚技能学習の障害が健忘症患者一般にまで広げられるものか否かは現段階では理解の及ぶところではありませんが、本症例に限って言えば知覚技能学習の障害が観察されたことは否定できないと考えます。

### 2. 認知技能について

ハノイの塔課題は5枚のディスクを用いた場合、最短31手で課題を終えることができます。川合氏は我々の症例が課題遂行の当初から35手で課題を達成できたことから、その後の学習効果は floor effect の影響から観察されていない可能性を指摘されています。確かに本症例は当初から課題の遂行そのものにはあまり問題は見られませんでした。しかし、その後には手数が増加する場面はやはり認知技能学習の障害を示唆する所見と筆者は考えます。Cohen (1984)

はハノイの塔課題を用いて健忘症患者と健常者の技能学習について検討しています。ここで報告されている健常者のディスクを動かす回数は、セッションが進むにつれて少なくなり、4回目のセッションでは最大にディスクを動かした被験者でも45回に留まっていました。ここで我々の症例と比較すると、我々の症例は最終のセッションであっても最大65手前後ディスクを動かしており、明らかにCohenが報告している健常者よりも課題達成に困難があったことが示されています。このことからやはり我々の症例は認知技能の学習には障害があったとみなすことは妥当と考えます。しかし、やはりこの課題でも同一の条件で健常者との比較がなされればさらに本症例の技能学習の障害をサポートできたと考えます。この点に関しましては今後の検討課題とさせていただきます。

いずれにせよ、手続き記憶には運動・知覚・認知のようなさまざまなレベルがあり、それぞれのレベルの手続き記憶を評価するにはそれに相応しい課題の選択と結果の解釈が必要なことは言うまでもありません。しかしこの問題はなにも手続き記憶に限ったことではなく、神経心理学的な評価を行う場合には常につきまとう問題であり、どんな認知機能の評価であってもある種の課題に含まれるパラメータを的確に分析し慎重な解釈を試みることは重要なことだと思います。

草々  
月浦 崇\*

## 文 献

- 1) Appollonio I, Grafman J, Clark K et al : Implicit and explicit memory in patients with Parkinson's disease with and without dementia. *Arch Neurol* 51 ; 359-367, 1994
- 2) Appollonio I, Grafman J, Schwartz V et al : Memory in patients with cerebellar degeneration. *Neurology* 43 ; 1536-1544, 1993
- 3) Cohen NJ : Preserved learning capacity in amnesia : Evidence for multiple memory systems. In *Neuropsychology of Memory*, ed by Squire LR, Butters N, Guilford Press, New York, 1984, pp.83-103
- 4) Milner B, Corkin S, Teuber HL : Further analysis of the hippocampal amnesic syndrome : 14-year follow-up study of H.M. *Neuropsychol* 6 ; 215-234, 1968
- 5) Snodgrass JG, Smith B, Feeman K: Fragmenting pictures on the apple macintosh computer for experimental and clinical applications. *Behav Res Methods Instruments Comput* 19 ; 270-274, 1987
- 6) 月浦崇, 鈴木匡子, 藤井俊勝ら : 健忘症患者における手続き記憶—運動技能と知覚・認知技能との解離—. *神経心理* 14 ; 216-224, 1998
- 7) Warrington EK, Weiskrantz L : New method of testing long-term retention with special reference to amnesic patients. *Nature* 217 ; 972-974, 1968

1999年6月1日受理

\* 東北大学医学部高次機能障害学, Takashi Tsukiura : Section of Neuropsychology, Division of Disability Science, Tohoku University Graduate School of Medicine